

専門講義の授業分析：スポーツ経営管理学のケース

豊村 伊一郎¹⁾

Class analysis concerning the special lecture: The Case of Sport Management (Sports-Keiei-Kanrigaku)

Ichiro TOYOMURA¹⁾

Abstract

In this study, I tried to analyze and evaluate my college lectures by using questionnaires in order to improve my teaching methods and grasp the students' ways of thinking, attitudes, actions in class, etc.

The main findings are as follows:

(1) Gendered distinctions

- Concerning lecture content, male students thought it was more difficult than female students. However, in terms of achieving a good understanding of the lectures, male students scored higher than female students.
- In response to the question “Did you get anything from the lectures?”, more male students answered in the affirmative than female students.
- For items like “Listening Will”, “Thinking Effort”, and “Contributions for Thinking Training”, male students scored consistently higher than female students.
- Regarding napping, only 1/4 of the students of both sexes did not sleep during class. The main reason for napping was fatigue caused by sports club practice (both male and female students), followed by fatigue caused by part-time jobs.
- More female students engaged in private conversations than male students.
- On the practical use of management, male students had higher percentage points than female students.

(2) Departmental distinctions

(GS: Sports Science Dept. versus GH: Health and Exercise Science Dept.)

- More GH students reported a good understanding of the lectures than GS students.
- For the question, “Did you get anything from the lectures?”, more GS students answered in the affirmative than students affiliated with GH.
- Regarding “Listening Will”, “Thinking Effort”, and “Contributions for Thinking Training”, GS students scored higher for all the ratios than GH students.

1) 福岡大学スポーツ科学部

Fukuoka University, Faculty of Sports and Health Science

(3) The impact of sport club affiliations

- ・ In response to the question “Did you get anything from the lectures?”, more students belonging to a sport club answered in the affirmative than unaffiliated students.
- ・ “Understanding of the lectures”, “Listening Will”, “Thinking Effort” “Contributions for Thinking Training”, all the ratios are higher for affiliated students than unaffiliated students.

I 緒 言

近年、大学における授業評価は定着した感がある。しかし、よりよい教育の実践は、究極的には教員一人ひとりが真摯にその改革・改善に取り組むことが不可欠である。そのためには、実状をより正確に把握することが重要である。つまり、学生が授業をどのように受け止めどんな態度や行動をとっているか、どう考えているかなどを明らかにすることはよりよい授業をめざす者にとって欠かせない要件である。近年、自己評価の状況は各大学のホームページに授業アンケート等の概要が見られ、各大学の紀要論文や全国大学体育連合の機関誌“大学体育学”などには授業改革に関する各分野の論文も掲載されている。しかし、経営管理の分野での講義で直接学生の考えを問う試みを公表したものは、他に見当たらない。そこで、初めての試みとして初歩的な観点からの受講者の分析を行った。すなわち、受講態度・行動、授業をどのように受け止めているか、学生生活を送る上でどのように考えているか、授業に対する構えや、姿勢などを多角的に分析する。そのことで授業を受けた学生の反応を浮き彫りにし、問題点を探り、延いては授業の改善を図る今後の指針としたい。

II 講義の概要

今回、研究の対象に選んだ講義は、授業シラバスにその内容が記載されているが¹⁾、その一部を引用・補筆して述べてみる。

“経営”といえば、即「お金儲けだ」と考えたり、“管理”といえば「堅苦しい、窮屈だ」とか「締め付けられて自由が束縛される」ということ

を連想する人が少なくない。また現代の日本社会では、管理社会、管理教育、管理野球^{2) 5)} などといった場合には、まずよい意味で使われることはない。つまり「管理＝悪」³⁾ であるという考え方が学校を含む世間（マスコミ）では一般的である（実は管理はよくも悪くもない無記⁷⁾ なのだ）。そのため、管理という語の代わりに、外来語のマネジメント（management）という言葉が使われることが多い。

ところで、経営や管理という考え方（概念）が問題にされ始めたのは、イギリスで始まった産業革命がアメリカに波及し、19世紀末から20世紀初頭にかけて、製品の大量生産が本格的に行われるようになってからである。「物をつくることをより効果的、効率的に行うにはどうすればよいか」という発想のもとに、そのための工場管理の合理化、さらにはそれ以降の経営全体の合理化の要請を軸にして進化・発展をつづけてきて、現在に至っている。学問の特質からみると、自然科学と異なり、経営（社会）現象を取り扱うので、多様な意見が存在する。

経営・管理という考え方（知識・技術）は、単に民間企業（会社）に留まらず、国、地方自治体、公団、学校、病院、財団、協同組合などに欠かせない要件である。さらに、本講義のメイン・テーマである体育・スポーツの分野に関しても、学校体育の経営はもちろんのこと、プロ野球の球団、Jリーグ、フィットネスクラブ、地域のスポーツクラブ等々、世の中にあるすべての組織運営にとって有効、不可欠なものである。また、個人がその人生をより良く生きるためにも欠かせない“考え方”（way of thinking）であると言える。従って、これらの能力を身につけることは個人として、組織人として重要な課題と捉えることがで

きる。なお、体育・スポーツ経営の分野の発展は著しく“見る、読むスポーツ”等にも広がりを見せているが、当該講義は“行うスポーツ”のマネジメント（主として地域・民間スポーツ）に焦点を絞っている。

Ⅲ 研究方法

- 1) 講義科目：スポーツ経営管理学（以下、SKK）、2年次開講選択科目
- 2) 調査期日：2009年12月19日（最終授業時）
- 3) 対象：F大学S科学部（学科：スポーツ科学科GS、健康運動科学科GH）学生
 - ・調査時回答者：男子104（GS：87、GH：17）女子40（GS：22、GH：18）計144名
 - 授業時、出席者全員にアンケートを配り、終了後回収した。なお無記名で成績には一切関係しないことを伝えた後、実施した。アンケートはすべて単一回答方式である。
 - ・部活動所属者は、男子78.6%、女子66.7%、無所属男子21.4%、女子33.3%であった。
 - ・主として、質問項目は4段階尺度で回答を求めた。その際、段階4と3は原則として、肯定的、2と1は否定的回答とみなした。
- 5) 分析の視点
 - ・講義内容について：講義の難易度、理解度、得るものがあつたか、教師の熱意
 - ・授業中の姿勢・態度：傾聴意欲、思考努力、思考能力鍛錬への貢献度
 - ・授業での行動：居眠り、私語、着席位置

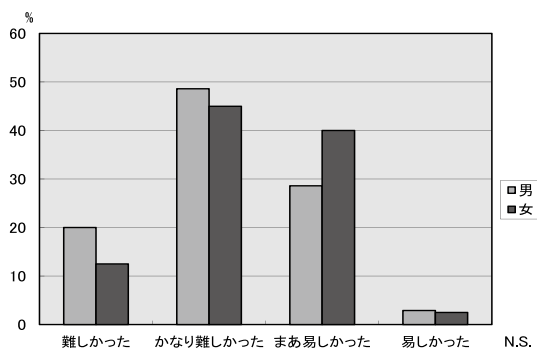


Figure 1. Difficultes in the content of lectures

- ・大学生活での考え方・行動：充実度、将来思考、現在の努力有無、マネジメントの活用、など
- ・性別、学科別、運動部所属・無所属別に分析した。その際、今回は性別の分析を主とし、他の2つは特徴的な点を取り上げた。

- 6) 統計的処理方法：SPSS（Version15.0J for Windows）を用いて、 χ^2 検定で処理し、5%未満を有意とした。

Ⅳ 結果と考察

1. 男女別の比較

1) 講義の内容について

まず、“講義の難易度”については、内容が「難しかった」と捉えている男子は20.0%、女子は12.5%。逆にやさしいと考えている学生が、男子2.9%（3名）、女子2.5%（1名）であった。また、「まあ易しかった」は、男子28.6%、女子40.0%、「かなり難しかった」は、男子48.6%、女子45.0%。総じてSKKの講義を難しいと思った学生（4 + 3）の割合は男子68.6%、女子57.5%である。有意差はないが男子の方が、内容を難しいと思っているものが多い（ $\chi^2=2.19$ ）。(Figure 1)

“講義の理解度”は、よく「理解した」と考えている学生は、男子19.0%、女子7.7%で、有意差はないが男子の方が理解の比率が高い。また、殆ど「理解できなかった」ものは男子6.7%（7名）、女子5.1%（2名）であった。一応理解したことには肯定的なもの（4 + 3）は、男子63.8%、女子

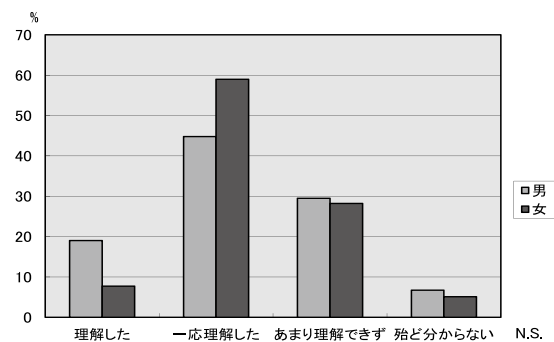


Figure 2. The understanding of lectures

66.7%である。逆にみると、3割5分の学生が理解に否定的である（2 + 1）。 $\chi^2=3.60$ (Figure 2)

次に、SKKの講義を受講して“得るものがあったか”という問いに対して、「得るものがあった」、男子41.0% 女子17.9%、4段階中の3の「かなりあった」を含めると、男子86.7%、女子79.4%。逆に、「得るものが全くなかった」は、男子4.8%（5名）、女子2.6%（1名）であった。否定的レベル2と1を合わせると、それぞれ13.4%と20.5%であった。この項目に関しては5%水準で有意差があり、男子の方が女子よりも得るものがあったと捉えている。 $\chi^2=8.34$ (Figure 3)

確かに日ごろスポーツに打ち込んでいる学生にとっては、SKKの講義での専門用語や経営管理の理論は馴染みがなく興味を引き難い点もある。筆者自身は常に有益で分かり易い授業を心掛けているが、さらなる工夫が必要であることを感じている。

次に視点をかえて、学生が“教師の講義に熱意

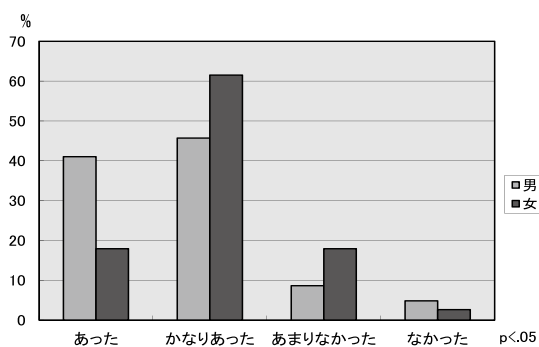


Figure 3. Did you get anything from lectures?

を感じたか”をみてみると、熱意を「感じた」ものが、男子57.1%、女子40.0%。まったく「感じなかった」もの、男子1.9%（2名）、女子0名。「かなり感じた」男子26.7%、女子57.5%である。つまり、肯定的なもの（4 + 3）は、男子83.8%、女子97.5%。1%水準で有意差が存在している。 $\chi^2=13.86$ (Figure 4)

2) 授業中の姿勢・態度

“傾聴意欲”つまりSKKの講義を“何かを得ようとして聴いたか”という視点からみると、そう「心掛けた」ものが、男子30.5%、女子15.0%で、女子の方が男子に比べ格段にその率が低い。逆に全く「心掛けなかった」ものは、男子6.7%（7名）、女子0名。「かなり心掛けた」者は男子42.9%、女子67.5%であった。この項目は5%水準で有意差がある。 $\chi^2=8.95$ (Figure 5) 知識を得ようとする姿勢の欠如は理解にも大きな影響を及ぼすことは自明のことであろう。

“思考努力”すなわち、授業を“どの程度考え

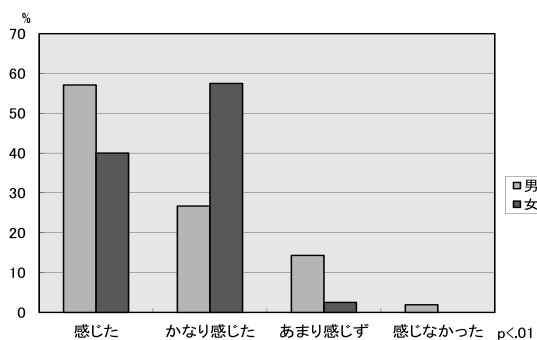


Figure 4. Did you feel your teacher's enthusiasm?

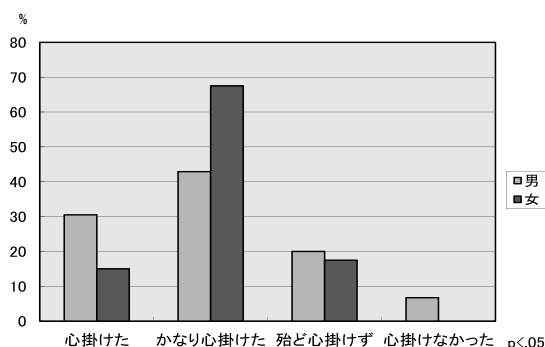


Figure 5. Did you try to get something?

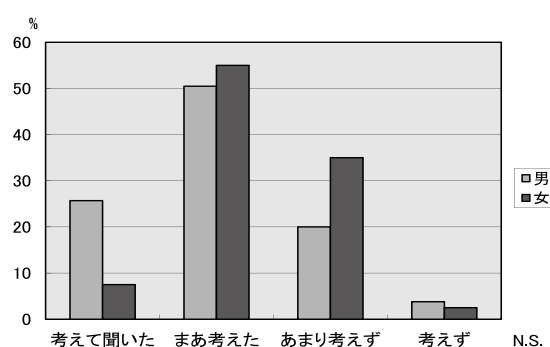


Figure 6. To what extent, did you consider while hearing lectures?

ながら聞いたか”という設問には、次のような結果が得られた。「考えて聞いた」は男子25.7%、女子7.5%。「まあ考えながら聞いた」は男50.5%、女子55.0%。「あまり考えなかった」は、男子20.0%、女子35.5%。まったく考えなかったもの男子3.8%（4名）、女子2.5%（1名）。一応肯定的に回答したもの（4+3）が、男子76.2%、女子62.5%であった。男子の方が考えながら聞こうとした意欲は高いといえる。逆に言えば、女子は男子に比べて「あまり考えず」が15.5ポイントも差がある。 $\chi^2=7.60$ (Figure 6) 読書の好ましいやり方は、ただ読むだけでなく、常に著者と対話しながら読むことが重要であるが、講義の場合も、ただ一方的に聞く、ノートをとるだけでは考える訓練にはならない。自分であれこれ考えながら聴くことが不可欠である。

次に、“思考能力鍛錬”、つまり、この授業は、“考える力を鍛えるのに役立ったか”否かの質問には、「役立った」は男子30.5%、女子12.5%であった。「かなり役立った」、男子45.7%、女子67.5%。逆に、「役立たない」男子4.8%（5名）、女子2.5%（1名）。総じて、肯定的な回答（4+3）は、男子76.7%、女子80.0%であった。約8割弱の受講生が何らかの思考鍛錬になったと考えている。 $\chi^2=6.72$ (Figure 7)

スポーツ技能が意欲をもって反復することによって向上すると同じように、考える能力も考える訓練（反復）によってその能力は育つものである。如何にそのことを痛感でき、日々それを忘れずに（人間は忘れる動物）、実践を継続できるか

がその重要なキーである。

3) 授業での行動

“授業中の居眠り”に関しては、全く「寝なかった」ものは、男子23.5%、女子25.0%で男女とも約1/4の学生がまったく寝ないで講義を受講している。逆に大部分寝たものは男子7.8%（8名）、女子5.6%（2名）であった。殆ど寝なかったものは、男子47.1%、女子52.8%。かなり寝たものは、男子21.6%、女子16.7%であった。 $\chi^2=7.11$ (Figure 8) 女子の方が男子に比べ、居眠りをしなかった割合が高い。これは、これまでの8つの設問のうち唯一女子が4のカテゴリーで男子を凌駕している項目である。

なお、居眠りをする理由をみると、最も割合の高いのが、「部活の疲れ」で、男子45.5%、女子40.7%。2番目が「バイトの疲れ」で、男子19.7%、女子22.2%。3番目が「不規則な生活」で男子15.2%、女子18.5%。4位は、男女とも「授業の疲れ」でそれぞれ12.1%、7.4%であった。さらに、女子は同率でSKKの内容（2名）があげられた。男子の5位は同じくSKKの内容で6.1%（4名）であった。 $\chi^2=1.48$ (Figure 9) 居眠り理由に関しては、「練習の疲れ」と「授業の疲れ」は男子の方がその割合が高く、「バイト」と「不規則生活」では女子の比率が高い。

授業中の“周りとの私語”に関しては、まったく「しなかった」ものが、男子41.9%、女子22.5%であった。逆に私語を「大いにした」ものは男子1.0%、女子2.5%であり、「かなりした」は男子

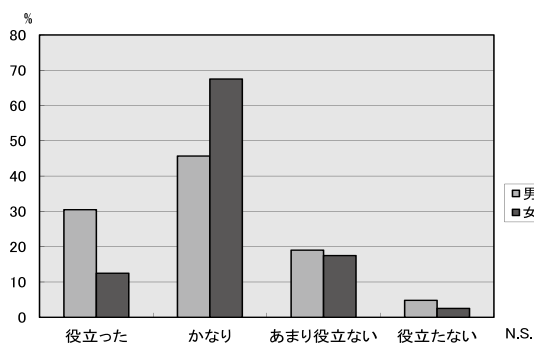


Figure 7. Did lectures contribute to your increased thinking ability?

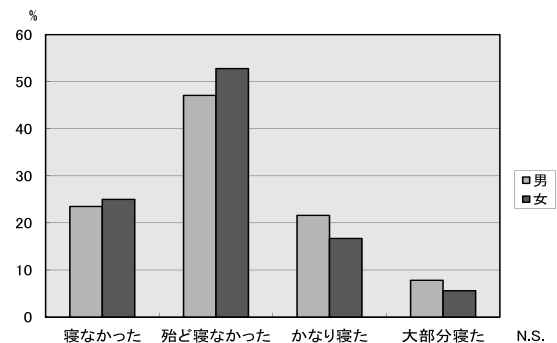


Figure 8. The nap during lectures

13.3%、女子30.0%で、それを合わせると、男子が14.3%、に対し女子は32.5%と18.2ポイントの差が生じている。この項目には、男女間に5%水準で有意差が認められる。女子の方が男子に比べて私語の割合が有意に高い。 $\chi^2=7.98$ (Figure 10) 女子は授業中の居眠りが男子に比べ少ない分、私語をしている可能性が推測される。

受講に際しての“座席位置”に関しては、教室の座席を前から4区分（前1→後4）に分割してどの辺に着席して受講したかの回答を求めた。講義はマイクを使用しているが、講義室の収容人数は250名の規模で教室のうしろ半分は講義が聞き取り辛い。特に最後部では、その傾向が強い。着席位置は、学生の受講意欲にも関係するのではと考える。

結果をみてみると、着席位置、前の、第1部分は男子32.4%、女子15%。これに対して、後ろの第4部分は男子6.7%、女子7.5%。第2部分には、男子27.6%、女子40.0%。半分より後ろの第3部分では男子33.3%、女子37.5%であった。この項目に

は、有意差はないが、前半分をみると、男子60%、女子55%であり変わりが無いが、前列第1部分のみをみると男子が女子の倍の比率を占めている。 $\chi^2=4.78$ (Figure 11)

4) 大学生活での考え方・行動

ここで、授業分析とは直接関係はないが、受講学生の全体像を把握する意味で、学生生活の充実度、将来思考、現在における努力有無、マネジメントの活用等に言及してみる。まず、“学生生活が充実しているか” 否かについては、「充実している」ものは、男子29.8%、女子40.0%で、女子のほうが充実の割合が高い。さらに「まあ充実」のものは男子50.0%、女子52.5%。それに対して「不充実」は男子6.7%（7名）、女子は0名で、充実に肯定的なもの（4+3）が男子、79.8%、女子92.5%で、女子の方が学生生活は充実している模様である。 $\chi^2=4.52$ (Figure 12)

日ごろ、“自分の将来について考えることがあるか” に関しては、「よく考える」は男子57.1%、

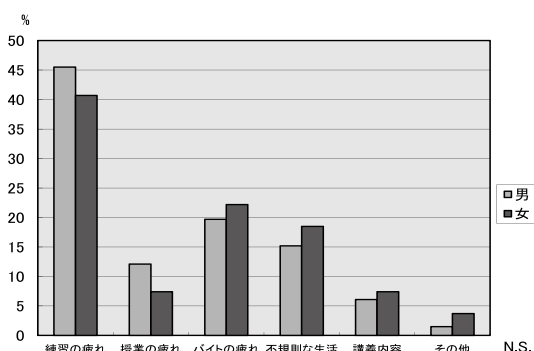


Figure 9. Main reasons for napping

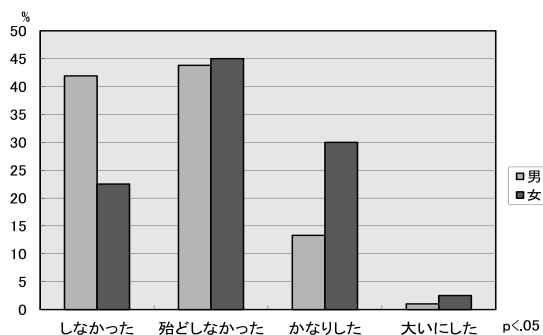


Figure 10. Private talk in class

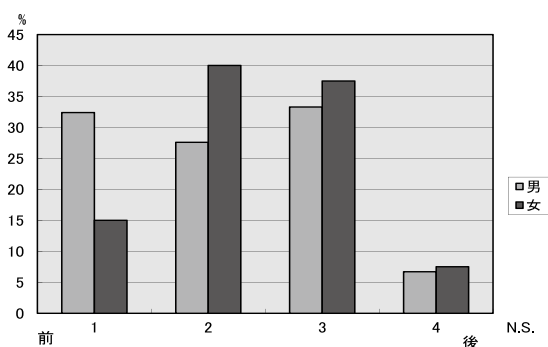


Figure 11. Sitting position

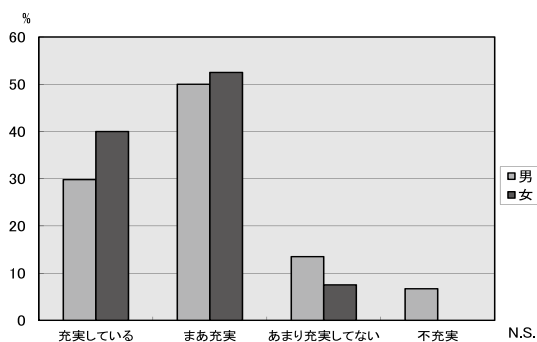


Figure 12. Are you living your student life to the full?

女子47.5%で、「まあ考える」は男子30.5%、女子42.5%である。総じて、考えるもの（4 + 3）は男子87.6%、女子90.0%であった。逆に、「あまり考えない」ものは、男子12.4%、女子10.0%であったが、他の項目とちがい、「まったく考えない」ものは男女とも皆無であった。 $\chi^2=1.87$ (Figure 13)

現在、「何かに努力しているか」については、「努力している」が男子56.9%、女子50.0%で7ポイント弱男子のほうが高いが、総じて、努力に肯定的なもの（4 + 3）が、男子では84.4%、女子は92.5%であった。なお、まったく努力対象を持たないものは男子のみで3.9%（4名）であった。 $\chi^2=4.36$ (Figure 14) なお、その“努力しているメインの対象”は、男子では、①部活動51.9%

②大学の勉強25.9% ③健康スポーツ関係の勉強14.8% ④教職試験勉強7.4%。女子は①部活動54.8% ②大学の勉強19.4% ③教職試験の勉強16.1% ④健康スポーツ関係の勉強9.7%である。男女とも運動部活動に力を入れているものが半数

を超えている。 $\chi^2=2.62$ (Figure 15) 男女間では、部活動と教職試験の勉強では女子がその割合が高く、大学での知識の習得と健康スポーツ関係の勉強では男子の割合が高い。

さらに、自己管理、目標設定、計画作成など各自の生活全般で“マネジメントを活用しているか”どうかに関しては、「管理している」もの、男子27.6%、女子17.5%。「まあ管理している」もの、男子41.9%、女子47.5%。まったくやっていないもの、男子5.7%（6名）、女子7.5%（3名）。肯定的なもの（4 + 3）を合わせると男子69.5%、女子65.0%のものが各自の生活において何らかのマネジメントを行っている。 $\chi^2=1.64$ (Figure 16)

ここで“卒業後の志望”をみると、男子では1位が「教員」で38.8%、2位は「未定」16.3%、3位は「公務員」で15.3%、4位は「一般企業」で13.3%であった。女子では、1位が男子と同じく「教員」で33.3%。2位は「健康スポーツ関係」で19.4%、3位が11.1%の同率で「一般企業、公務員、未定」が並んでいる。 $\chi^2=18.45$ p

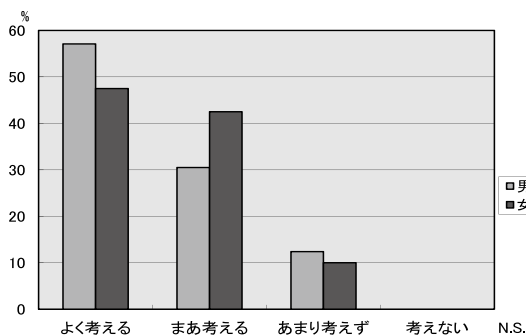


Figure 13. Do you usually think about your future?

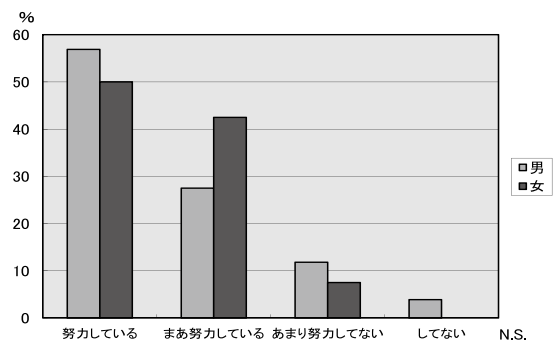


Figure 14. Are you striving to do something now?

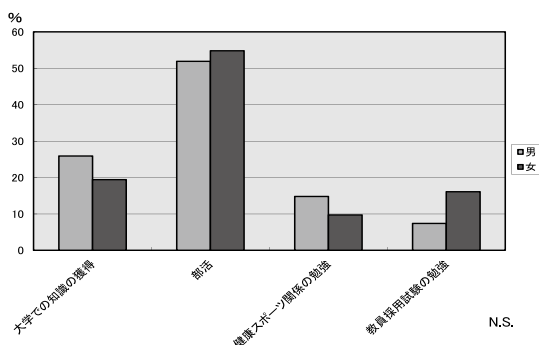


Figure 15. What are you striving for most?

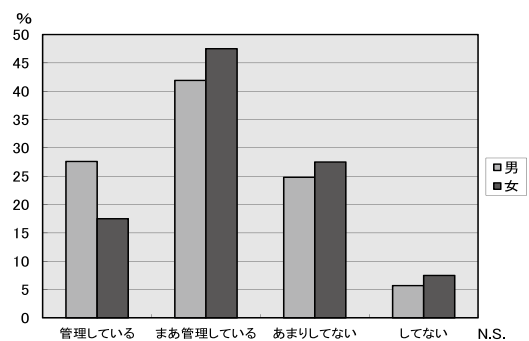


Figure 16. Do you manage yourself in your daily life?

<.05 (Figure 17)

2. 学科別の分析

つぎに学科別に特徴ある項目を考察してみる。まず“講義の理解度”は、よく「理解した」ものはGS13.4%、GH19.4%でGHのほうが高いが、逆に理解に対して否定的な（2 + 1）レベルでは、GS34.9%、GH41.6%とGHのほうが高い。 $\chi^2 = 1.99$ (Figure 18)

SKKの講義で“得るものがあつたか”につい

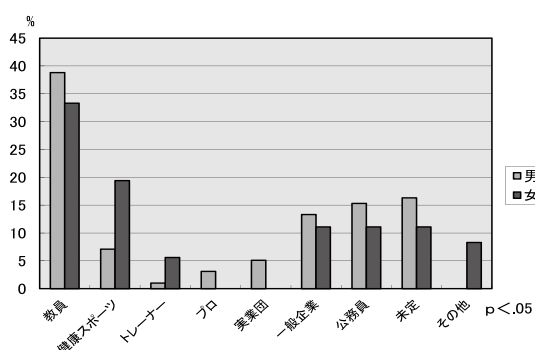


Figure 17. What do you want to be after graduation?

ては、GS：38.4%、GH：22.2%で、肯定的なレベル（4 + 3）ではGS：89.3%、GH：69.4%で、ともにGSのほうが、比率が高い。この項目は5%水準で有意差がある。 $\chi^2 = 9.97$ (Figure 19)

傾聴意欲、即ち“何かを得ようとして聞いたか”では、そう「心掛けた」ものはGS：29.2%、GH：11.1%で、聞くことに肯定的なもの（4 + 3）ではGS78.8%、GH63.9%でいずれもGSのほうが傾聴意欲は高い。 $\chi^2 = 6.12$ (Figure 20)。思考努力、すなわち“どの程度考えながら聞いた

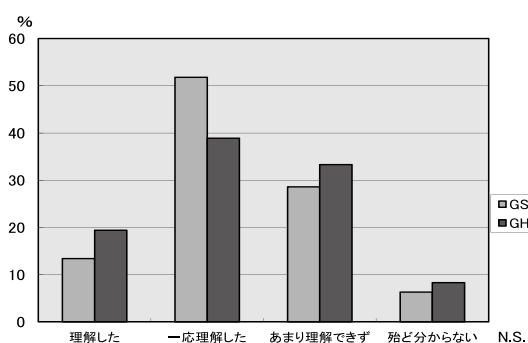


Figure 18. The understanding of lectures

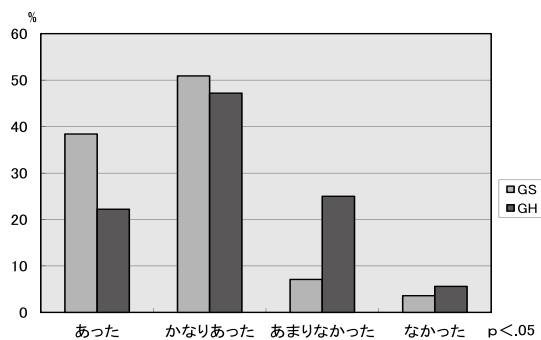


Figure 19. Did you get anything from lectures?

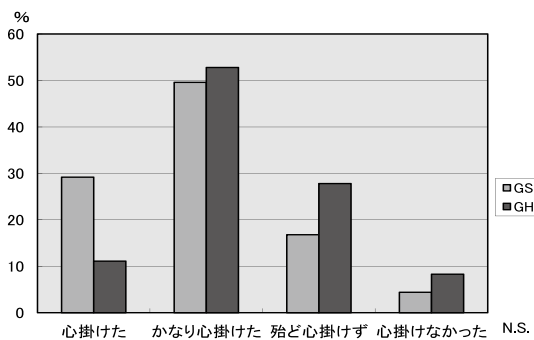


Figure 20. Did you try to get something?

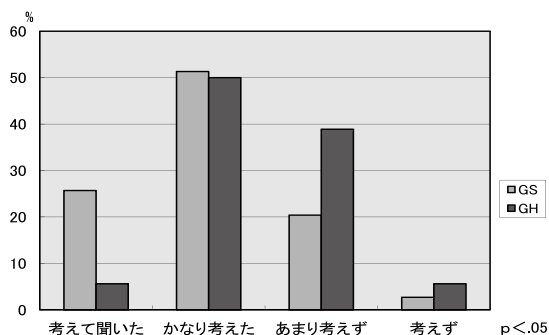


Figure 21. To what extent, did you consider while hearing lectures?

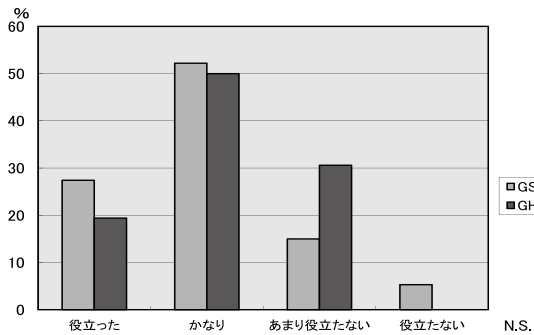


Figure 22. Did lectures contribute to your increased thinking ability?

か”では、よく「考えながら聞いた」はGS：25.7%、GH：5.6%で、考えながら聞いたことに肯定的なもの（4 + 3）はGS：77.0%、GH：55.6%でともにGSのほうがその割合が高い。この項は5%水準で有意差がある。 $\chi^2=9.78$ （Figure 21）

“この授業は考える力を鍛えるのに役立ったか”という点では、「役立った」GS27.4%、GH19.4%、肯定的なレベル（4 + 3）ではGS79.6%、GH69.4%でともにGSのほうが高い比率を示した。 $\chi^2=6.12$ （Figure 22）

“授業中の居眠り”については、全く寝ていないものは、GS23.4%、GH25.7%で、殆ど寝なかった（4 + 3）を合わせるとGS72.0%、GH74.3%であった。居眠りに関しては大きな違いは見られない。 $\chi^2=4.24$ （Figure 23）居眠りの両学科の理由をみると、GSでは、①練習の疲れ51.4%、②バイトの疲れ20.3%、③不規則な生活12.2%。GHでは①不規則な生活31.8%、②練習の疲れ22.7%、③バイトの疲れ18.2%であった。

“現在何かに努力しているか”については、

GS：57.3%、GH：47.2%が「努力している」と回答している。努力に肯定的なレベル（4 + 3）ではGS：88.2%、GH：83.3%、でこの項目もGSのほうが比率は高い。 $\chi^2=2.14$ （Figure 24）

“努力の具体的な対象”としては、GS：①部活56.0%、②大学の勉強23.1%、③健康スポーツの勉強12.1%、GHでは①部活45.8%、②大学の勉強25.0%、③健康スポーツの勉強16.7%の順である。

“卒業後の志望”に関しては、両学科とも教員希望が最も多く、GS36.5%、GH34.3%。次いでGSは未定19.2%、公務員15.4%、一般企業13.5%の順で、GHでは2番目に圧倒的な比率31.4%で健康スポーツ関係を希望している。GHの3、4番目は一般企業11.4%、公務員8.6%であった。

学科別を全体的にみても、カテゴリー4では、GSの方が勝っているのが、講義で得るものがあつた（16.2ポイント差）、傾聴意欲（18.1ポイント差）、思考努力（20.1ポイント差）、現状での努力（10ポイント差）などがある。他方、GHではよく理解した（6ポイント差）と全く寝なかつ

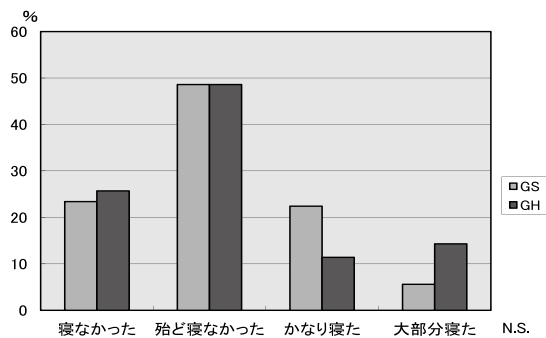


Figure 23. The nap during lectures

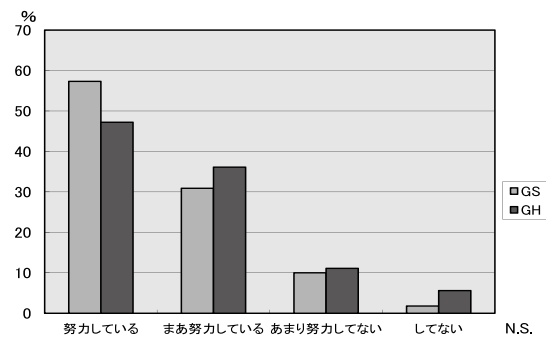


Figure 24. Are you striving to do something now?

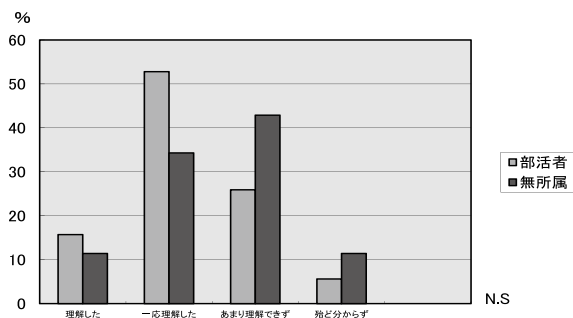


Figure 25. The understanding of lectures

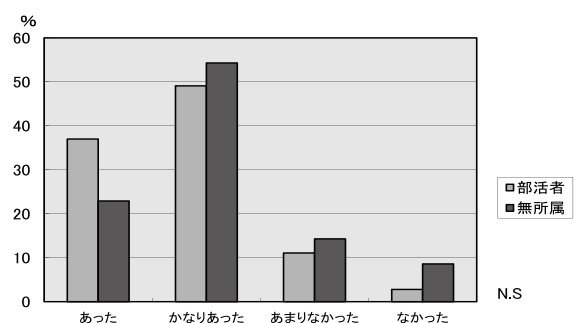


Figure 26. Did you get anything from lectures?

た（2.3ポイント差）の2つであった。

3. 運動部所属・無所属別にみた分析

ここで、部活動所属者（以下、部活者）と無所属者の間の特徴ある項目を考察してみる。

部活の有無と“講義の理解度”の関係をみると、3と4を合わせた、「理解した」レベルでは、部活者68.5%、に対して無所属者では45.7%とSKKの理解率に22.8ポイントという差がみられた。 $\chi^2=6.03$ (Figure 25)

つぎに、“講義で得るものがあったか”という項では、4の得るものが「あった」では、部活者は37.0%、3+4の肯定的な意見は86.1%。一方、無所属者においては、得るものが「あった」は22.9%、肯定的な考え（3+4）は77.2%であった。ともに部活者の方がその割合が高い。 $\chi^2=4.07$ (Figure 26)

“何かを得ようとして講義を聴くことを心がけた”割合（3+4）は、部活者76.2%、無所属者68.5%である。部活者のほうが聞こうと心がけた

者が多い傾向にある。 $\chi^2=6.85$ (Figure 27) また、“どの程度講義を考えながら聞いたか”では、よく「考えて聞いた」は部活者23.9%、無所属者8.6%とその差は15.3ポイントで、さらに3と4を合わせた肯定組みは、部活者77.1%、無所属者54.3%で部活者のほうが考えながら講義を聴こうとしたものの割合が高い。この項目には5%水準での有意差が存在する。 $\chi^2=9.55$ (Figure 28)

講義が“考え方を鍛えるのに役立ったか”という項目については、3と4を合わせた比率は、部活者、81.6%のものが役立ったと考えているのに対して、無所属者では60.0%とかなりの差が見られる。 $\chi^2=7.77$ (Figure 29)

“授業中の居眠り”については、「まったく寝ていない」もの、部活者20.2%、無所属者33.3%で、13.1ポイント、無所属者のほうがその比率が高い。 $\chi^2=4.02$ (Figure 30)

ここで両者の“居眠りの理由”をみると、部活者は練習の疲れが一番で37.6%、2番目がバイトの疲れと不規則な生活とともに10.1%、4番

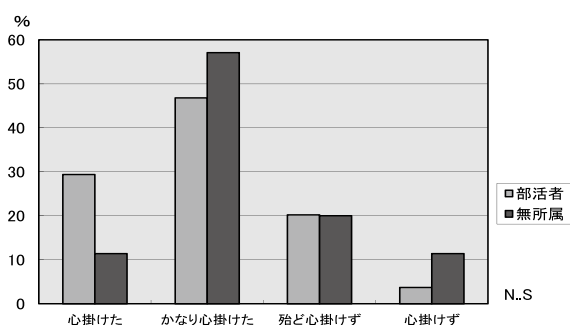


Figure 27. Did you try to get something?

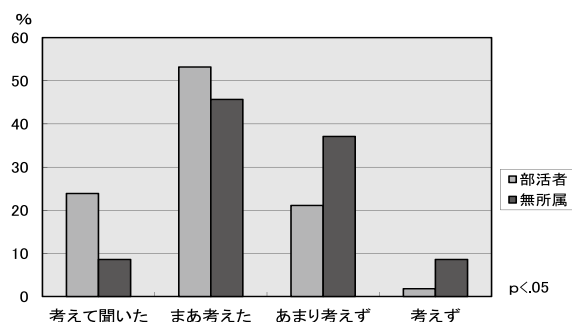


Figure 28. To what extent, did you consider while hearing lectures?

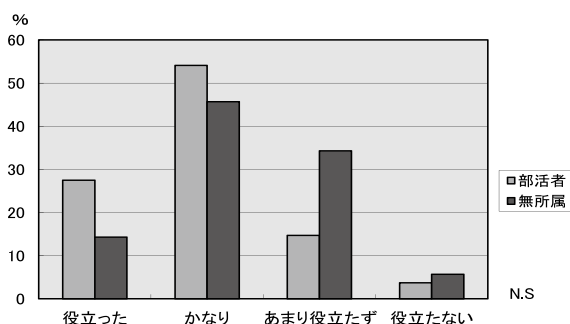


Figure 29. Did lectures contribute to your increased thinking ability?

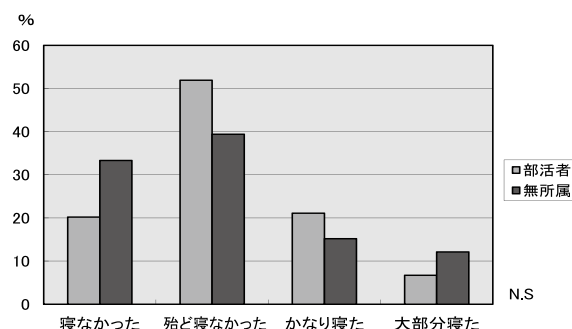


Figure 30. The nap during lectures

目が授業の疲れで5.5%である。他方、無所属者では1番がバイトの疲れで20.7%、2番目が授業の疲れ13.3%、3番目が不規則な生活10.3%が原因となっている。

さらに、各自の生活において“マネジメントを行っているか”否かに関しては、3と4を合わせた肯定派は、部活者72.5%、無所属者54.2%と部活者の比率がここでも高い傾向がみられた。 $\chi^2=4.75$ (Figure 31)

つぎに“学生生活の充実度”に関しては、「充

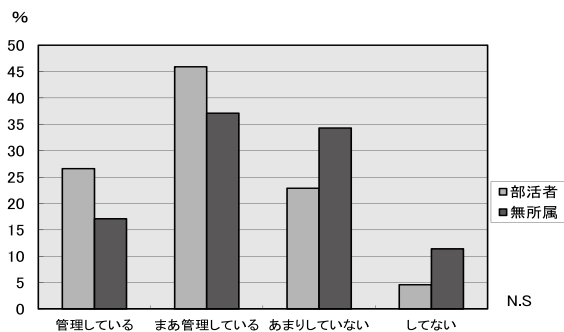


Figure 31. Do you manage yourself in your daily life?

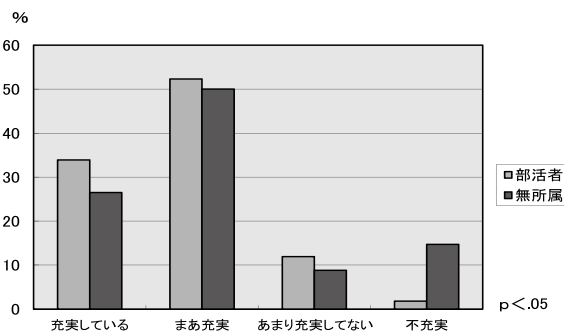


Figure 32. Are you living your student life to the full?

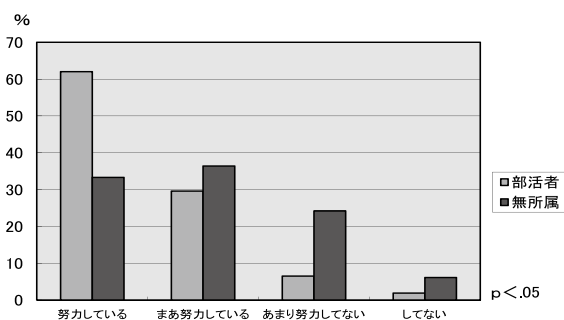


Figure 33. Are you striving to do something now?

実」に肯定的なもの（3 + 4）では、部活者86.2%に対して無所属者76.5%であった。特に「不充実」に関しては、部活動者1.8%に対して無所属者14.7%と大きな差が見られた。この項目は5%の有意差がある。 $\chi^2=9.47$ (Figure 32)

現在“何かに努力しているか”に関しては、部活者がよく「努力している」が62.0%に対し、無所属者では33.3%と大きな差がみられた。この項目にも5%水準で有意差がある。 $\chi^2=13.21$ (Figure 33)

V まとめ

これまで考察してきたことを、ここで総括してみる。

1) 男女別

- ・講義の内容は男子のほうが難しいと思っている者が多い。しかし講義を「よく理解」した者は男子のほうが女子より多い。
- ・講義から「得るものがあつた」では、男子のほうが有意に高い。
- ・教師の熱意を感じたものは男子の方がその割合が高い。
- ・傾聴意欲、思考努力、思考訓練への貢献度は、男子のほうが高い。
- ・居眠りに関しては、男女とも「まったく寝ない」で受講した者は、全体の約1/4である。居眠りの理由で最も比率の高いのが「部活の疲れ」で4.5割—4割。次いで「バイトの疲れ」が2割前後であった。
- ・私語は全くしない者は男女で大きな差があり、女子のほうにおしゃべりが多いと言える。
- ・生活の充実度では女子のほうがその比率が高い。
- ・マネジメントの活用では男子が勝っている。
- ・将来に対する思考はよく考えるものは男子が勝り、男女とも全く考えないものは皆無であった。
- ・現在の努力対象は男女ともその第1が部活動で50%強である。
- ・卒業後の志望は、男女とも教員がそれぞれ38.8%、33.3%で1位であった。

2) 学科別

- ・講義をよく理解した者の比率はGHのほうが高い。
- ・講義で得るものがあつたと考えている者の比率はGSのほうが高い。
- ・傾聴意欲、思考努力、思考力訓練への貢献度、マネジメントをよくしている割合は、すべてGSのほうが高い。
- ・居眠りの両学科の1番の理由は、GS：練習の疲れ、GH：不規則な生活である。
- ・現在、何かに努力している割合もGSの方が高い。その具体的対象は、両学科とも部活の比率が最も勝っている。
- ・卒業後の志望は、両学科とも教員希望が1番で、GHでは2番目に健康スポーツ関係の希望がGSに比べ際立って多い。

3) 運動部所属・無所属別

- ・講義での得るものがあつたかという点では部活者のほうがその割合が高い。
- ・講義の理解度、傾聴意欲、思考努力、思考力の訓練への貢献度はすべて部活者のほうが勝っている。
- ・授業中の居眠りでは、まったく寝なかった者の比率は無所属者のほうがやや高い。居眠りの一番の理由は、部活者：練習の疲れ、無所属者：バイトの疲れである。
- ・マネジメント、生活の充実度においても、さらに何かに対して努力している割合もすべて部活者のほうが勝っている。

VI おわりに

独自の項目を作成し、アンケート手法を用いて、自己の授業分析を試みた。初めての試みのため不備な点も多々あるが、明らかになった現時点での問題点を述べてみる。

性別における分析では、気になる点は、講義の理解、講義で得たもの、傾聴意欲、思考努力、思

考鍛錬貢献度の肯定的回答4において、男子に比べて女子の数値が全て低いことである。特に講義で得たものと思考努力では有意な差が存在している。この一因としては、女子における私語の多さが考えられる。女子の3割強がかなりのレベルでおしゃべりをしている。今回は私語の理由や内容を聞いていないが、私語しながら講義は聞けないし、理解も難しい。

学科別の分析では、4において、講義で得たもの、傾聴意欲、思考努力、思考鍛錬貢献度の4項目でGHの数値が全てGSに比べ低い。特に講義で得たものと思考鍛錬貢献度では有意な差が存在している。この原因は何かを究明することも今後の課題である。

部活動所属・無所属別分析では、4において、ほぼすべての項目にわたって部活者の数値が無所属者に勝っている。

今回の調査は補講時に実施したため欠席者が多数いた。またこの結果はあくまでSKKの授業に関するデータであることに限界があることは認識している。このような前例のない研究を公開することはある意味、自己の粗を曝すことになるので躊躇もあったが、“隗より始めよ”の諺に倣ってまとめてみた。

参考文献

- 1) 福岡大学：学修ガイド(2009) p.295
- 2) 後藤寿一：広岡達朗が教える悪の管理学(1986) 泰流社
- 3) 石井和彦：管理は教育の自殺行為(1985) 労働教育センター
- 4) 鹿児島重治：悪い規制、良い規制(1995) サンドケー出版局
- 5) 川上哲治：悪の管理学(1982) 光文社
- 6) 三戸 公：公と私(1988) 未来社
- 7) 森 政弘：矛盾を活かす超発想(1989) 講談社 pp.141-143

(平成22年9月13日受理)